

秀歌三十首+今年の収穫

清水あかね

ばくがもういいと言つたら母は死ぬそんな気がするごめん無理させ

十月号・高山 邦男

夏の闇ちゃんと燃やしておかないと 今年の花火の封を切りたり

細溝 洋子

コロナ禍を「ソロの時間」と言ひたまふ思へどさびし夕暮街道

塩川 郁子

いつ知れず未来は過去へ変はりゐて我が現し身に錆のみ溜る

水本 光

鳴く
かわす
鳴く渡りの闇の深ければ地球自転の鈍き音

加賀谷 実

きみどりの付箋だらけの森のなか幸福論の出

口を探す

雨雨 雨汰

裏踏地に今年から咲く向日葵の挨拶を受け立

ち止まりたり

しおせとくや

ナポレオンの顔した夏雲ぐんぐんと水色の空

を侵攻している 十一月号・大澤 澄代

せきひんの赤というのは真紅ではなくて優しき百日紅色

十亀 弘史

息継ぎをせず泳ぎきる要領で油淋鶏定食を食へべきる

長沼 通郎

夜間部の授業に行けば生徒をらず象蛇どもが泣きてゐる夢

十二月号・伊藤 一彦

すずらんの街灯にぼうと灯が点り道行く人も

なで肩になる

森屋めぐみ

灰色と緑と黒の鳩のいろ太古の壺のごときが飛べり

大谷ゆかり

手術後の身体ひとつが真昼間の流木のごとくただ横たわる

青木 泰子

父の骨集めるようにそれぞれの本の名を読む

小さき声で 一月号・田中 拓也

クリニックの帰りに買はむローストビーフ本

町水木通り緑蔭の富士屋

経塚 朋子

教え子の朝のスピーチ眺めれば世界は両手のなかにありたり

山本 緑人

美しきコンセンサスを取りましよう組織としての家族もしかり

アダムス理恵

九十二回歳末迎うるわれの目に愛恋の色八重のさざん花

二月号・宇都宮とよ

銀色のスツーケースにもたれつて陰性となつた子が登場す

小川真理子

教師にはアルトの声がふさわしい傾性音で奏でる「おはよう」

三月号・今泉 摩美

切山椒無病息災厄除けはさんしようと伸ばさぬ江戸つ子の味

矢代 朝子

粉雪が君のまつ毛に降りつもるその光景が私の冬だ

五月号・齋賀 万智

馬糞のような猫が地面に落ちていて春の匂いを放つておりぬ

六月号・佐佐木定綱

何という夜明けの海だ耀きだひとつかなしみ

さざめきて消ゆ

丸山 稔

三日間家を出ざれば暗闇に鳥賊食う深海魚ラ
ブカの氣分

七月号・佐佐木幸綱

春神樂小さきをいくつも載せ撓む宮崎平野の

三月、四月

大口 玲子

父ははのなきこの世なれ春風にてふてふ一つ
揉まれてゐたり

本田 一弘

毎日を家族のことだけ考えてドアを開けたら

地球がなかつた

八月号・武田ますみ

八月は戦争の月と吾子が問う戦争しないと誓
う月だよ

山田 英夫

無選歌欄と次の選者の欄の作品評を担当
させていただいた。一月号から十一月号ま
で二十一首の歌について評を書いたが、毎
月、どの歌を取り上げるかに一番悩んだ。

その二十一首を七分の一に絞るのだから、
全く断腸の思いである。

当初、秀歌の基準を、「はつとするよう
なもの」の見方、「斬新な表現」と考
え、選び

始めた。また毎月の作品評では、連作で読
んだ上で鑑賞をしていたのだが、三十首に
残す歌は、一首で立ち上がる歌でなければ
ならない。そして、並べて印刷した二十一
首を一週間持ち歩いて何度も読み返した。
そうするうちに、改めて気が付いたのは
「短歌は抒情詩である」ということだった。

ツイッター（現X）などSNSで発信する
人「短歌は抒情詩である」ということだつた。
ツイッター（現X）などSNSで発信する

若者は、なぜ俳句ではなく短歌を表現手段
として選ぶのか。時々ツイッター短歌を読
んで楽しんでいるという高校三年生の生徒
と話していく、やはり其感を呼んでいるの

は作者の心情表現なのだと感じた。背景、
状況ごと気持ちを表現するのは俳句では難
しい。真情の吐露にはやはり三十一音の短
歌の方に勝ち目があるようだ。

「はつとするようなものの見方、斬新な
表現」の歌を探しながら、一方で作者の思
いを強く感じさせる、読者の胸を打つ歌を
求めた。試行錯誤を重ねていきついたのが
この三十首である。

一首目の高山邦男の歌はまさに真情の吐
露である。しかも今まさに死を迎えるよ
うする母への真情。こういう歌は外せない。

コロナ禍もすつきりと終わることなく四
年目を迎え、自粛生活で打撃を受けたはず
のご高齢の方々の作品が冴えている。また、
長引くウクライナ戦争の影響で平和への思
いの強い作品が多く詠まれるのも頷ける。
そして、新しい才能が続々と現れてきた
ことも強く実感させられた一年だった。
最後に九月号より。

・割られたる林檎の断面 陽をうけて艶や
かな白き陰のやうなり 松本 実穂
・八月のカラリアティードの雲光るあすから
職場復帰できます 喜多 宣夫
・畏むとは繭のごときに包まるものと思
ひぬ頭を垂りながら 篠田和香子
・巨大なる龜の実物大の絵の前で市長と握
手を交はず 服部 崇

秀歌三十首+今年の収穫

久松宏二

晴れマーク三つ並べば梅を干し平和な暮らし

のあかしとなさむ

十月号・小峰 圭子

歌えずに過ぎた時間を取り返すようにならぬ

は一途に立てり

秦 千依

枯小枝 落葉 団栗 松ふぐり 土になじみ

て足裏にやさし

十一月号・堀越 照代

骨のない秋刀魚を食べる生きること簡単にさ

れ生きる三月

安野ゆり子

チャットにて解答促す小テスト五択の数字が
画面に層なす

児島 直美

一振りの七味唐辛子 子は父のしぐさを真似

てしまふ 十二月号・高畠とよ子

福田樹生里

三年をコロナ禍に生き全校が初めて歌ふマスクのままに

枯葉 仁

溢れさうなライブカメラを見てをりぬ嗚呼こ

森山なつめ

三年ぶりの祭り決まりて沸ふつと動き始める
市民センター 一月号・竹中 亮子

童謡を歌ふことさへなかなかに迷ひたれども
ハミングに換ふ 中島 君夫

一時保護するか否かの判断を押し付けられし
A.I.の難 東 由美

のど飴は許されている校則にあまた不思議な
抽斗のあり 古川 仁

「ぜんそく」や「鼻炎」に並ぶ「不登校」札
の貼られた薬局の壁

二月号・片山佳代子

教育は読み書き算盤嘘をつくなら盗むな殺すな
それだけのこと 後藤 秀彦

台でなく人と数へてよいらしいわれより足取
り軽き口ボット 佐々木智子

夕暮の故里言葉すれ違う人と交わせる「お上
がんなさい」 西村 三智

五月号・古島 信子

台でなく人と数へてよいらしいわれより足取
り軽き口ボット 佐々木智子

眠りつつ姿勢崩さぬ少年のスマホの角にとど
まる光 原田 治子

六月号・生野由美子

白鳥はスッと地をけり飛びたてり安曇野の沢
ゆ順に眞面目に 渡辺 栄子

ふ遠山桜

誰ひとりちやほやしない桜木の葉を受けとめる
秋の黒土 三月号・大谷ゆかり

餅好きの父の墓前にたんまりと供えし餅を食
む順番に 東 由美

全員がミユートのままに進みたるるう学校の
zoomの作法 山本 緑人

教育は読み書き算盤嘘をつくなら盗むな殺すな
それだけのこと 後藤 秀彦

台でなく人と数へてよいらしいわれより足取
り軽き口ボット 佐々木智子

眠りつつ姿勢崩さぬ少年のスマホの角にとど
まる光 原田 治子

六月号・生野由美子

白鳥はスッと地をけり飛びたてり安曇野の沢
ゆ順に眞面目に 渡辺 栄子

ふ遠山桜

「父母は生きてるだけで偉いのです」誕生日

に届きしメール

佐藤 栄子

若草の着物を選ぶ春なれば 雨が上がりて
木々の艶めく

篠田和香子

本人であれど暗証番号を忘れた母は母にはあ
らず

原 ナオ

この幸せ何にたとえん百寿にて花陰に開く花
見弁当

七月号 伊藤 深雪

すれ違うたび手を挙げる運転士「私はロボッ
トではありません」

奥村 知世

傘寿迎えし二人の会話どこまでも自由自在よ
かげろう搖るる

黒木 幸子

令和四年十月号から翌五年九月号まで、
初めて作品評を担当した。「選ぶ」という

行為で選歌基準をどこにおくか。まずは自
分がよいと思う歌を選ぼうと考えた。それ
では「よい歌」とはどういう歌なのか。一
年間試行錯誤の選歌であつた。その作業は

難しかつたが楽しく、大事なことを学んだ
一年であつた。作者の歌いたいこと、訴え
たいことがある歌。下句の着地の仕方が成
功した歌。助動詞や助詞の使い方で微妙な
心理を表現した歌。私の中ではこういつた
所に選歌基準が一つあつたかと思う。以
下、自分にとつての収穫を書いてみたい。

まず、アフターコロナをどう歌うか。我
慢していた三年間をどのように回復するか。
それぞれの立場の違いはあるが、その姿勢に

は共感するものがあつた。中でも、それであ
なたはどうなのですか、という問い合わせの
歌。回復への熱い思いと現実とのジレンマ
を表現した歌が印象深かつた。また、コロ
ナ禍で加速した感のあるzoom・スマホ・AI・
ロボット。まだ新しい分野で、テーマや素材
がごろごろとあり、様々な切り口の歌が今後

益々出てくると感じた。そして私が教育現場
にいることもあり、こうした歌の中に「教育
とは何か」というテーマが潜んでいることに
気が付くことができた。

最後に、故郷や風土・風習の歌が、人に
とつていかに大事であるかを改めて実感し
た。一年間の選歌で、日本の四季や風土の
持つ力をより身近に感じ、その歌をよしと
して選歌できるための歴史観・古典への眼
差しが大事であると思つた。

一年間を通して、日本はもちろん海外を
含めたその地方のパワー・歴史・風習・言
葉を、歌が便りのよう届けてくれるとい
う思いを味わうことが出来た。そして「心
の花」の各地の歌会情報と照らし合わせて
みるのも楽しく、まさに結社に所属してい
るからこそその魅力なのだと実感した。

作者の思いから遠い鑑賞もあつたと思う
中で頂戴したお便りは、大変励みになりました。
一年間ありがとうございました。

秀歌三十首十今年の収穫

河野千絵

能面も能装束も能樂師の肉体を離れ息づきぬ

たり 十月号・原口嘉代子

草木の名すらすら出でし先生の思ひ出さるる

水無月尽日

大熨 允子

甘くないクリームパンが好きらしいきっと正

しい人なのだろう 十一月号・秦 千依

形見る白地の浴衣で逢いにゆく木島泉先生

の歌碑さくら色

清水 春美

初代光右衛門で誰とふ兒よ我也知らねど折々
墓石を洗ふ

荻原 桂子

「阿」に始まり「吽」に近づき今を生く言葉

を少し置いてゆかむと

北川 秀子

ハロウインになれば私は思い出す服部くんを

擊つた銃声

柴山与志朗

季語もなく切れ字もなくて短歌には樂市樂座

のごとき明るさ

犬飼 亮介

やさしき布と寡黙な林檎一月の光射しおりセ

ザンヌの絵に

五月号・桑野 智章

また明日が大きな口を開けていて昨日のままで

の我をのみこむ

塚本 瑞江

蜂蜜の瓶へともどるなめらかさあんなふうに

子育てすればよかつた 三月号・川又 和志

陸奥湾に白鳥はただ浮かびたり何もふれずに

しづめゆく筆

小澤 法子

消えゆく雪は

森山なつめ

図書館のベンチに座りページ繰るニコニコ顔
の少年は良し

十月号・友部美奈子

数分後毎日向かいの席の人今朝も座った一安
心だ

中川 美和

署名活動一緒にすればそれぞれの自他の垣根
の高さ異なる

二月号・清水あかね

吾子ならば何と詠うか奇跡の夜アースにムー
ンウラヌス重なる

笛本 信夫

ハロウインになれば私は思い出す服部くんを
擊つた銃声

柴山与志朗

南西に雲は膨らみ海面に雨は柱のごとく立ち
たり

長沼 通郎

やさしき布と寡黙な林檎一月の光射しおりセ
ザンヌの絵に

五月号・桑野 智章

また明日が大きな口を開けていて昨日のままで
の我をのみこむ

塚本 瑞江

見映え良く耳障り良きその呼び名ヤングケア
ラーの足元は沼

志水千登世

方言に敬語をやはらかく絡め患者を案内しゆ
く看護師

山口和賀子

怪我をしていない左手で書く文字がいやに自
由を楽しんでいる

西村すみこ

身仕度を母の形に整えるエゴン・シーレの人
物のように

四月号・国兼 麻貴

せりなずなすずしろ摘んでゆくように言葉を
さがす作文演習

児島 直美

やさしき布と寡黙な林檎一月の光射しおりセ
ザンヌの絵に

五月号・桑野 智章

また明日が大きな口を開けていて昨日のままで
の我をのみこむ

塚本 瑞江

見映え良く耳障り良きその呼び名ヤングケア
ラーの足元は沼

志水千登世

方言に敬語をやはらかく絡め患者を案内しゆ
く看護師

山口和賀子

夕空を遮るものはあらざるに飛び立つ鳴いはず

れも曲がる 六月号 しおせとくや

八本の腕はサーティアンダギー作っていたり

手話べりしたり

山本 緑人

口腔をそろそろと撫ず棒つきの飴に似ている
すばんじぶらし

七月号・大谷ゆかり

いくつかの言葉にマーカー引いて二十歳
の吾の息づかい読む

東 由美

五歳児は目を見開きてこぶしふり声を張り上げ
「ことり」を歌う 八月号・木村美枝子
走るより歩いた方が早く着くような気がする
虹の下まで

小宮 敦子

一年間、本欄担当の機会をいただき、歌
を詠んで集うことの喜びを改めて感じた。

四季の移ろい、季節の行事、家族や友人と
の時間、出会いや別れ、職場風景、日々の
さまざま。歌はそれぞれに、人生の場面を
鮮やかに映す。

日常の情景描写や感慨の表白からさらに
一步踏み込み、独自の感性や人生観に基づ
いた表現の展開を試みておられる作品に
は、おおいに感銘を受けた。秦千依、森山
なつめ、長沼通郎、桑野智章、アダムス理
恵、松本実穂、しおせとくや、山本陽子、
川又和志、金有美各氏の歌が思い浮かぶ。
総じて、連作を意識して作歌しておられる
作品に、質の高さを感じた。

滋味に富んだユーモアのある作品も魅力
なため、長沼通郎、桑野智章、アダムス理
恵、松本実穂、しおせとくや、山本陽子、
川又和志、金有美各氏の歌が思い浮かぶ。
総じて、連作を意識して作歌しておられる
作品に、質の高さを感じた。

的だった。若林卓宣、田中茂、井上俊英各
氏の作品を記憶する。後藤田良子、今井洋
子、小林惠美子、尾上宏名各氏の仕事の歌も、
楽しみに拝讀した。

二〇一二年九月のエリザベス女王崩御に
際して多くの歌が詠まれており、彼女の存
在の大きさを再認識した。総じて時事詠が
少ないよう思つていた中、二〇一三年七月
号掲載の谷ちえみ氏の連作には、敬意を
おぼえた。同年二月号では、柴山与志朗氏
が服部剛丈さんのことと詠んでおられる。
何を詠むか、どのように詠むか、ということ
と時事詠は鋭く問う。

るよう思つた。特に海老原愛、山本緑人、
齋賀万智、内田さやか、福崎享子各氏の作
品が心に残っている。

紙幅が尽きてきたのでお名前を列举する
のは控えるが、心惹かれた歌に印をつけて
いて、気がつけば宮崎在住の方の作品だ、
ということがまことに多かつた。いずれも
快活であたたかくユーモアに富み、開放的
な懐かしさがあつた。明るく伸びやかな風
土を思う。

数々の楽しい飲食の歌も忘れがたい。本
号の発行は師走。それぞれの台所で、地方
色豊かな正月料理を準備しておられる場面
を読ませていただいたのを思い出す。皆さ
ま、どうぞ良い新年をお迎え下さい。一年
間、どうもありがとうございました。